チョーサーの「粉屋の話」における人物描写

浜　口　恵　子

チョーサー（Geoffrey Chaucer）の時代といっても十四世紀の後半だが，この頃には，種本を用いて，それを自分流に演出し直して創作するという「他からの借用」という文学上の伝統がまだまだ生きていた。『カンタベリー物語』（*The Canterbury Tales*）の中で，カンタベリーへの巡礼の旅の道中，余興として始められた話合戦という設定で，巡礼のひとり粉屋（Miller）が語る話は，チョーサーが口誦文学の伝統の中で何度も耳にしたと思われるファブリオ（*fabliau, fabliaux*, pl.）を粉本にして創られたという説が有力である[1]。中世ヨーロッパに流布した滑稽な韻文のお話，ファブリオ，その筋立てをそのまま繰り返えすのでは，聴衆の退屈を誘うことは当然。そこでチョーサーは，このファブリオの素材を利用して，話の筋が聴衆にはもう知れてしまっているという前提のもとで，彼の聴衆を楽しませる工夫をしなくてはならなかった。彼はどのような工夫をして，彼独自の笑いの世界を切り開いていったか。これが本稿の主たる目的である。

I

チョーサーの「粉屋の話」（“The Miller's Tale”）とその類話[2]を調べてみると次の三つのモチーフが共通している。1. 洪水のモチーフ：教区司祭は人妻への恋の想いを遂げる為，説教で洪水の予言をしてその人妻の夫を騙す。予言を聞いた夫は，洪水に備えて浮き舟となるべき桶を作り，自分一人その中に避難して洪水待機。その間，桶の外で予言者たる教区司祭は人妻に近づき想いを遂げる。2. 間違った場所の口づけのモチーフ：夫又は最初

の訪問者は桶の中，一方，教区司祭は人妻とお楽しみのところに，もう一人，この人妻に気のある鍛冶屋がやって来る。冷遇されるが，口づけを得るまでは去ろうとしない。人妻の代りに，教区司祭が彼のお尻をつきだして，鍛冶屋に口づけさせて侮辱を与える。3. 焼きごてのモチーフ：侮辱された鍛冶屋は戻ってきて二度目の口づけをせがんでおいて，また突き出された教区司祭のお尻にさきほどの復讐に熱い焼きごてをつきつける。「助けて！　水！」（“Water!”）の教区司祭の叫びに桶の中の夫は，洪水の到来と信じて桶のつり綱を切り共に落下。

以上の三つの共通のモチーフの中で演じられる登場人物達のドタバタ行為，また彼らならず者達の受ける三者三様の報復は，類話にもチョーサーの話でも共通している。しかし「粉屋の話」とその類話を詳細に比較してみると，「人物描写」に関して両者の間に大きな相違があることが明らかとなる。前者では，「人物描写」にことさら重点が置かれ，話のおもしろさの中心になっているのに対し，後者では，「人物描写」がほとんど簡略化されている。このことから，まず伝統的なファブリオにおける常套的な「人物描写」について調べてみる必要があるだろう。

ファブリオでは笑いの中心が登場人物の行為そのものの動きにあった為，その行為のスピード感からくるおかしさを妨げない為に人物描写などの無駄を省略する必要があった。そこで考え出された工夫が，類型の設定と単一の意味しか持たない形容詞を呼称としてつけるという手段だけで，聴衆に登場人物の性格，役まわりをわからせることであった[3]。チョーサーの話の登場人物達も同様な呼称を付されていることから，チョーサーはこの形容詞の呼称というファブリオの伝統をひきついでいながら，一方で，このファブリオの「人物描写」の希薄性に，自分自身の独創発揮の場をみいだしたといえる。

また，チョーサーの「粉屋の話」とその粉本たるファブリオの比較が，チョーサーが，ファブリオのモチーフと登場人物の行為をそのまま受け継いでいることを示していることは既に述べた。ファブリオと同様，チョーサーの

登場人物達は，いづれも罪深き人間だが，間違い続きのドタバタ行為を演ずるうちに最後に応報を受けて泣きっ面をかき，聴衆は大笑いのうちに彼ら悪人共を赦すことができる。ところが，女性だけはいつも応報をまぬがれて無傷。したがって，女性は最後まで聴衆の反感を買い続ける。これは中世の女性蔑視 (antifeminism)[4] の流れを汲むもので，チョーサーも彼の女主人公 Alisoun の人物描写を通じて，この伝統についての自分の態度をほのめかしている。特にチョーサーは女主人公 Alisoun からは形容詞の呼称をはずしている。これもこの中世の女性蔑視というファブリオの伝統を意識した上での彼の Alisoun 描写と関係してくる。

Alisoun に関する描写を辿ってゆくと，田舎の自然の風物のイメジャリがめだつ。たとえば，“ morne milk ” (3236), “ any sloo ” (3246), “ the newe pere-jonette tree ” (3248), “ a berne ” (3258), “ bragot or the meeth ” (3261), “ hoord of apples leyd in hey ” (3262), “ a prymerole ” (3268) などが挙げられる。またこれに劣らず多いのが，動物のイメジャリである。具体例を挙げると，“ wezele ” (3234), “ a wether ” (3249), “ a colt ” (3282), “ piggesnye ” (3268), “ any swalwe ” (3258), “ kyde or calf ” (3260), “ a mous ” (3346) と動物のイメジャリが列挙される。これらのイメージは，田舎の自然界を裸で駈けまわる動物の姿を聴衆の脳裏に刻みこむ。このように Alisoun に動物的属性を与えたことで，チョーサーは，「女性は男性に劣り，その人格さえも認められない」という女性蔑視の根本理念[5] を表出し，また同時に，動物である彼女に何を要求しても所詮無理なこと，と諦観と寛容の交錯した気持を表白している。チョーサーの聴衆も，罪深い行為ゆえに当然受けるべき応報も，動物とあらば，必要もあるまいと悟り，Alisoun に対する反感も和らぐのである。人格化されないこの女主人公 Alisoun からチョーサーは形容詞の呼称をとりはずした。それは，チョーサーにとって，この形容詞こそは，彼の作品の中で，現実味を帯びた生々しい「人間」として登場してくる人物達の性格と，その性格ゆえに彼らのな

めるアイロニ[6]の鍵となるからである。動物，Alisoun であれば，自己の性格ゆえのアイロニなど無縁のはずである。それでは，この動物 Alisoun をめぐる三人の男共，Nicholas, Absolon, John はどのような呼称と性格を与えられ，それゆえの応報を受けアイロニの犠牲者となるのか。そのチョーサーのファブリオの伝統の継承と工夫の中に，彼のどんな笑いの世界があるのか。形容詞の呼称と性格及び，彼らの，ファブリオでなじみの応報を受ける運命との因果関係に焦点を置きながら，Nicholas, Absolon, John の順に一人づつの描写を具体的にみてゆくことにする。

II

「粉屋の話」では，人妻とよろしくやる好首尾の教区司祭役を学生 Nicholas が演じる。彼は大工 John の家の下宿人で天文学に夢中である。この彼には‘hende’なる呼称が11回もついている。‘hende’という形容詞は，昔，ロマンスのヒーローが，女性に「愛される条件」の属性としての‘gentle’‘courteous’,‘pleasing to sight’の意味でそのヒーローの名前につけられたエピセットである[7]。Nicholas は“lyk a mayden meke for to see”(3202) と描写されているように，ロマンスのヒーローの様に優男である。‘hende’と呼ばれるにふさわしいロマンスのヒーローが恋人の名誉を傷つけない為の宮廷風の約束 (courtly code) のひとつとして守った‘deerne love’(secret love)[8]をこの Nicholas も心得ているとしるされている。(3200) しかし‘hende’なヒーローを気取る彼を，もともとこの種ファブリオの類型たる好色な教区司祭の役をあてがわれるものと推測している聴衆は，宮廷風優雅さと好色という組みあわせに気づいて，チョーサーのこの‘hende’の用い方に何か別の魂胆があるのではないかと疑う。さらに，それならば，この‘deerne love’(secret love) も，決して宮廷風でない姦通の為に秘密を守る必要があるのではないかと勘繰りたくなる。

案の定，彼は下宿の主人 John の若い妻，Alisoun に近づき，Alisoun の

"queynte" (secret part) (3276) や "haunchebones" (腰) (3279) に巧みに「手」を動かして下品きわまりない方法で求愛を始める。この Nicholas に Alisoun は "Do wey youre handes, for youre curteisye!" (3287) と叫ぶ。せっかく 'hende' なる名誉な呼称を頂戴してロマンスのヒーローを気取る彼も，Alisoun にこう叫ばれては 'gentle', 'courteous' の意味の 'hende' の呼称を返上しなくてはならない。ところが，この 'hende' には 'gentle' や 'courteous' 以外にも様々な意味が含蓄されているのである。

OED によって検すると，'hende' はそもそも 'hand' に発するもので次のような意味が同時に含蓄されていて，いずれも十四世紀にはポピュラーな用法であったという。1. Near at hand. 2. Ready to hand, convenient, handy. 3. Ready or skilful with the hand, dexterous, expert, skilful, clever. 4. Pleasant in dealing with others, courteous, gracious, kind, gentle, nice. 5. Pleasing to sight, comely fair, nice. 6. Gentle, courteous or gracious one applied to ladies or persons of noble rank[9].

Nicholas の容貌は 5. 'pleasing to sight' としても，その外見を除く彼の性質や行動は 4 や 6 の 'gentle' 'courteous' 以外の意味，たとえば 1. Near at hand, 2. Ready to hand, 3. Skilful, expert, clever 等が，ことごとくぴったりとあてはまる。彼は愛されるべき条件としての 'hende' ぶりを 'gentle' や 'courteous' とは違った意味で兼ね備えているのである。そもそも彼が Alisoun に近づけたのも，彼女の家の下宿人として彼がいつも彼女の 'near at hand' ('hende') な条件に居たからである[10]。また彼の 'skilful' や 'clever' ('hende') の特性は，Alisoun のような女性の愛を得るための条件でもある。彼は 'clever' ('hende') たるゆえに Alisoun の動物性を素早く見抜き，「手先」の動かしを器用に，つまり 'skilful', 'dexterous' ('hende') にして動物の如き Alisoun の五感にアピールする。彼女が体をくねらせて助けを呼ぶと，たちまち戦略を変えて，'mercy' (3288) (愛の嘉納) を願って叫び，'faire' (3289) な (美しい) 言葉で語り，

熱心に身を捧げて，Alisoun をロマンスのヒロインの様に扱ってみせることにより[11]，彼女を煽てあげ，いい気持にさせる。機敏で直接的で臨機応変な攻撃法は，実際的で野性的な Alisoun にふさわしい 'hende' ('skilful', 'clever') な方法だったといえる。

こうして愛の約束を取り付けた Nicholas は，Alisoun に "Myn housbonde is so ful of jalousie/That but ye wayte wel and been privee, /I woot right wel I nam but deed. . . /Ye moste been ful deerne, as in this cas." (3294–3297) と秘密を守ることを要求される。天文学と並んで 'deerne love' (secret love) にも 'expert' ('hende') である彼，この Alisoun との 'deerne love' (secret love) を成功させる為に，天文学を利用した予言で John を騙すことになるのだが，この時の彼のいかんなく発揮された 'hende' ぶりが，みものである。

Alisoun との共謀の後，金曜日から日曜日まで，Nicholas は部屋に鍵をかけて閉ぢ籠る。John にとっても，下宿人 Nicholas は，いつも 'near at hand' ('hende') であった為，その彼の姿が三日間も全々見えないことに気が気でない。こうして Nicholas は，John の関心を引き，彼を自分の部屋に誘きよせる。必死で心配して Nicholas の体をゆさぶる John を見ても，心動かすことなく石のように無言でじっと坐っている Nicholas の巧妙 'skilful' ('hende') ぶりは，お人好しで単純な ('sely') John と滑稽な対照をなす。やっと口を開いた Nicholas, "Allas! /Shal al the world be lost eftsoones now?" (3488–3489) の独り言で，John の好奇心をそそり，さらにじらしたあげく，秘密を守るなら，ある事を打ち明けようと言う。先程，Alisoun から秘密にすることを条件に彼女の愛を受けることができた。今度は，Nicholas が，John に，そのある事を秘密にすることを条件に出す。これも Nicholas の 'hende' ('clever', 'skilful') なトリックである。

旧約ノアの洪水の故事におけるノアは，天文の際中に神の啓示を受けたという伝説が当時流布していた[12]。Nicholas もこの天文する者としてのノアを

知っていて，自分をノアと同じ立場に置くことで，天文に疑いを持っていたJohn を宗教的に厳粛にさせられると考えた。この‘hende’(‘clever’) な計算はみごとに当り，John は，天文による Nicholas の洪水予言，つまり彼の計略に，簡単にひっかかってくる。

ノアの洪水の予言を聞いて，若い妻 Alisoun の安否を心配する John に“... but if thy wittes madde, /To han as greet as grace as Noe hadde. /The wyf shal I wel saven, out of doute”(3559–3561) と神の秘密，つまり，このノアの洪水の事を他言して気が狂わない限り，自分が John の妻は救ってやろうと言う。大工 John さえ自分の助言通りに従ってくれれば，彼の計略は成功して Alisoun との情事たる‘deerne love’(secret love) も John にばれずにすみ，Alisoun を夫の嫉妬から救うことができる。このように，彼は，Alisoun, John と，この同じ屋根の下の者には彼の‘hende’ぶりを縦横無尽に発揮して，神の如く采配を振るってきた。ところがこの家のアウトサイダー，Absolon との接点で，‘hende’な Nicholas は失敗し，それが今までの計略をもしくじらせてしまう。

大工が桶の中で熟睡中，Nicholas とAlisoun は，John のベッドで望みを遂げていたちょうどその時，Absolon が Alisoun に求愛にやって来る。お尻をつきだしてキスをさせた Alisoun の悪戯に大笑いした Nicholas, Absolon が復讐用の焼きごてを持って再びやって来た時，たまたま小用に立っていて Absolon の‘near at hand’(‘hende’) にいた Nicholas は，今度は Alisoun に代って冗談をさらに面白くしよう (‘amenden al the jape;’〔3799〕) と‘hende’(‘skilful’) な悪戯を思いつく。“Spek, sweete bryd, I noot nat where thou art”(3805) と言う Absolon に答えて，Nicholas はお尻をつきだして，さらに雷鳴のように大きな放屁をする (“... leet fle a fart, /As greet as it had been a thonder-dent”〔3806–3807〕)。この後“Help! water!”(3815) というお尻に焼きごてをつきつけられた Nicholas の叫び。

Nicholas は天文では予言を得意としていたが，自分の「身近な」('hende') 出来事は予測できず，運命の落し穴に落ちてしまう[13]。彼の肉体に受けた報復は，彼の 'hende' な悪戯ゆえに受けたものであり，しかも 'hende' たる彼の最大の武器，'deerne' (secret) であることをうっかり忘れて窓に顔ならぬお尻をつきだして，外にばれてしまった。

この Nicholas の逆転劇こそは，ファブリオからひき継いだ滑稽さであり，笑いの精神に欠かせない要素なのである。特に Nicholas が利口でそつのない 'hende' ぶりを発揮してきたゆえに，その 'hende' な性格があだとなってしくじり，手痛い打撃を受けるというこの設定は凡庸な聴衆の胸のすくところであり，姦通という難事を手抜かりなく，うまくやってのけたNicholasへのそれまでの羨望や反感などの複雑な気持を健康な笑いへと昇華することができるのである。

III

Nicholas が 'hende' ぶりを発揮して Alisoun の求愛に成功した後，やおら初登場してくるのが，恋の争奪戦における彼のライバル，髪の毛の美しい教区書記の Absolon である。聖書でなじみの名前，Absolon という名を付けられていることから，そして Absolon という人物に固着した恥辱を復讐する人物という概念を前提とすると[14]，聴衆は，彼が例の「間違った場所の口づけ」の事件で恥辱を与えられ，さらにおなじみの「焼きごて」の事件でその復讐をする鍛冶屋の役まわりを演ずるのではないかと推測する。

この教区書記 Absolon に付されるエピセットが 'joly' で，都合7回。この 'joly' の同時代的意味として，*OED* の与えるところによると，1. fresh. 2. finely or 'bravely' dressed. 3. joyous, high-spirited. 4. lustful 5. self-confident, arrogant, full of presumptous pride. が列挙されている。彼は御自慢の金髪を常に手入れし，流行の靴をはき，'finely dressed' ('joly') な身なりをしている。ロマンスのヒロイン描写の常套[15]

を用いて描かれた彼の姿は必然的に‘fresh’(‘joly’)な印象を一瞬与える。だが彼が男性であることを思い出せば，女々しくて[16]，戯画化の対象になっていることがわかる。踊り，歌，楽器をたしなみ，いつも‘myrie’(merry, joyous)(3325)(‘joly’)な彼にも実は“somdeel squaymous/Of fartyng, and of speche daungerous.”(3337-3338)と行儀作法には気むずかしい‘arrogant’で‘full of presumptous pride’(‘joly’)な一面がある。こうみてくると，彼は宮廷風雅びた愛の真似をして[17]自分を宮廷風の恋をする人に擬して自惚れて(‘self-confident’〔‘joly’〕)いるのではないかと思えてくる。そのくせ，彼のセレナーデ[18]には“love-longynge”(3705)などの官能的欲求を表わす語がちぐはぐに混じっていたりする。この語は中世の流行語のひとつではあったが，チョーサーではこの Absolon と戯画化されたトーパス卿(Sir Thopas)以外には使用されておらず，宮廷的理想主義とは相いれない肉体的欲望をさすことばであった[19]。また仲介を通す贈物はなんと，官能の欲求をたきつける酒場で買ったワッフル[20]だったりと，宮廷の恋人気どりのあしもとから馬脚をあらわし，彼の‘lustful’(‘joly’)な本性をのぞかす。

彼はこの宮廷風愛を実践する男性としての‘joly’ぶりで，恋の争奪戦のライバル，Nicholas に対抗しようとする。しかし彼がおしゃれに身を崩せば崩す(‘joly’)程，女々しく滑稽な姿になり，現実的な Alisoun にはグロテスクにみえる。また，彼の御自慢のセレナーデも彼女にとってはうるさくて仕方ない。動物的な彼女には，せっかくの宮廷作法も逆効果。この彼の‘joly’ぶりこそが恋の争奪戦の敗因だったのである。

さらに，この Absolon の‘joly’の様々な性格がひきだされて彼の滑稽さが頂点に達するのが，「間違った場所の口づけ」のクライマックスへと彼が入ってゆく過程である。

‘ful prively’に Alisoun を訪ねる決心をした Absolon，既に彼女には Nicholas なる恋人がいるとも知らず「今日こそはうまくゆくぞ」と自惚れて

('joly')(self-confident), ひとりではしゃいでいる('joly')(high-spirited)。

To Alison now wol I tellen al
My love-longynge, for yet I shal nat mysse
That at the leeste wey I shal hire kisse. (3678–3680)

Absolon を伝統的な「間違った場所の口づけ」のモチーフでは，とんでもない場所にキスをする鍛冶屋の役とみている聴衆は，この彼のキスへの自信満々 ('joly') (self-confident) さにアイロニを感じある種のいじわるな期待で笑いを浮かべるに違いない。さらに "My mouth hath icched al this longe day; /That is a signe of kissyng atte leeste." (3682–3683) とキスの予感を手放しで大喜びして，まず第一に香料を嚙む Absolon の言動は，満場の聴衆を大爆笑の渦へと巻き込んだだろうことは容易に想像できる。実はこのキスの予感とは，彼の悲運の前兆なのだが，自惚れの強い ('joly') (self-confident) 彼は，それに気ずかないで，成功の前兆ととって有頂点 ('joly') (joyous, high-spirited) である。ここにキスという言葉に，普通のキスと「あらぬ所にする」キスの二重の意味が響きあって言葉のアイロニをかもしだす。

宮廷の恋人のごとき装いをして ('joly') (finely dressed), 意気揚々 ('joly') (high-spirited) と Alisoun の窓の下に参上した Absolon, これから「間違った場所の口づけ」まで，彼一流の宮廷風恋人の 'joly' ぶりを誇り高く ('jollily') (proudly) 演じ続ける。オホンとせきばらいをして ('cough') からセレナーデをながながと披露する。この高尚なる雰囲気を破るかの如く Alisoun の罵倒が返ってくる。"Go fro the wyndow, Jakke fool . . . /I love another . . . /Go forth thy wey, or I wol caste a ston" (3708–3712). Alisoun は愛する Nicholas とせっかくのお楽しみのところを邪魔されて腹立ちまぎれに Absolon を追い払う。「わたしには，もう一人の好い人 (another) がいるんだよ」(3710) と。ところが 'joly' (self-

confident）な Absolon は，そのもう一人（another）を彼女の夫と思い込んだのか，また彼女の拒絶も宮廷作法での羞じらいを表わす常套手段と思ったのか "Allas, and weylawey, /That trewe love was evere so yvel biset!"（3714—3715）と宮廷風の恋人ぶってキスをしつこくせがむ。ここで彼が自分はもてていないとあっさり認めて立ち去っていれば，彼は侮辱を受けずにすんだのである。ところが Alisoun の "Wiltow thanne go thy wey therwith?"（3718）「キスさえすれば行くんだね」という言葉にたちまち有頂点 'joly'（high-spirited）になって "I am a lord at alle degrees"（3724）と自称宮廷の恋人たる 'pride'（'jollity'）の高さを示す。「神経質」（'squaymous'〔3337〕）な彼はまた唇をごしごしこする[21]。今か今かと待っている聴衆の前で，彼はぐずぐずして，さんざんじらせたあげく，問題のキスへと入ってゆく。'hende' な Nicholas が彼の 'hende' ぶり故に報復を受けるように，この Absolon も 'joly' な性格故についに間違った場所，Alisoun のお尻にキスをしてしまい，応報を受ける。

この間違った場所のロづけの経験の中で，突如彼に付されていたエピセットが 'joly' から 'sely' へと変る（3744）。彼は joly Absolon から sely Absolon へと変身したのである。漆黒の闇夜で彼が遭遇したものは，彼の人間をガラリと変えてしまう程[22]，彼の宮廷風恋人としての 'pride'（'jollity'）を傷つけ，「神経質な」彼にとって想像を絶するショックだった。さらに，Nicholas と Alisoun の野次は彼をして現実にめざめさせる。Alisoun が自分の雅びた愛の対象となる女性ではなかったこと，彼女には Nicholas なる恋人がいて自分は実際にはもてていなかったことなど思い知らされるのである。それに気づかず，'joly' ぶりにうつつをぬかしていた彼は最初から哀れに愚か（'sely'〔3744〕）であったとも言える。その優雅な恋人気どり（'jollity'）の愚かしさに気づかずにこの事態まで来たのは，彼の自惚れがちな 'joly'（self-confident）な性格故に他ならなかった。この間違った場所のキスは彼の上流社会の恋人気どりの自惚れ（'jollity'）を粉砕するショック療法だっ

たわけである。

皮肉なことに，しかし定石どおりキスーとんでもない箇所へのキスーによって「恋のわずらい」（'love maladie'〔3757〕）から癒された後，彼はすっかり'joly'であることをやめてしまった。一度'sely'なる属性で呼ばれてからは，もはや彼には二度と'joly'なる形容詞はつけられない。この'sely'を付された時点で彼は全てを悟り，"I shal thee quyte . . . /My soule bitake I unto Sathanas, /But me were levere than al this toun, /Of this despit awroken for to be". (3746-3752) と復讐の鬼へと変貌し，「焼きごてのモチーフ」の仕掛人の役割を果たす[23]。

鍛治屋に焼きごてを借りにゆく Absolon には，かつての'joly'ぶりのひとかけらも見られない。鍛治屋との妙に冷静な会話がそれを如実に語る。焼きごてを手に戻ってきた Absolon, 騙す為にオホンと咳をして（'cough'），もとの'joly'ぶりを芝居して再びキスを乞う。この Absolon の計略に見事にひっかかってくるのが，恋の争奪戦の勝者'hende'な Nicholas である。彼は Alisoun の横で Absolon の勿体振った'joly'な宮廷の恋人ぶりを聞いてきた。又懲りずにやって来た Absolon の'joly'ぶりに'hende'な悪戯心をそそられる。ここで Nicholas が一発放屁するわけだが（'leet fle a fart,'〔3806〕），この Nicholas の挙動にまたしても驚いた神経質で気むずかしい（'squaymous'）〔3334〕）Absolon は一気に'jollity'の芝居から復讐の鬼へと一変し，Nicholas に焼きごてをつきつけて打撃を与える。'jollity'をかなぐり捨てて現実に目覚めた故に，彼は今度こそは復讐に成功したのである。'joly'なる彼の性格がいかに彼を動かしてきたか。ここにチョーサー独自の面白さがある。

IV

恋の争奪戦のライバル達 Absolon と Nicholas が大工の家の窓で対決しているちょうどそのクライマックスに，高く天井に吊りあげられた桶の中に

押し込められ忘れられているのが，大工 John の存在である。「熱い，水だ」(3815) の Nicholas の叫びでドスンとものすごい勢いで落ちて初めて聴衆は洪水のモチーフもまだ続いていたことを思い出す。

この大工 John は，この話の前口上 (Prologue) で間男されることがすでに暗示されていること，また 'sely' という形容詞がその属性として付されていることから，間抜けでいつも騙されるお人好しの夫の類型をそのまま演じるものと聴衆は予期する。ところがこの大工 John も，'sely' なる呼称をつけられ，その性格故に 'hende' な Nicholas に利用され，最後に応報を受ける。

この年寄りの John は若い妻を自分の命よりも愛している。それ故，彼はいつも嫉妬深く，間男されているのではないかと詮索し，「若くて奔放な」('wylde and yong' 〔3225〕) 妻をかご ('cage') に閉じ込めている (3224–3225)。このような苦労も実は自業自得，自分の 'sely' な性格故の報いなのである。彼はあわれにも無知 ('sely') な為にローマの賢人カトー (Catoun) の "man sholde wedde his simylitude" (3228) の金言を知らず，彼には分不相応な若くて野性的な女性 Alisoun を妻にしてしまう。これがそもそも彼の不幸の発端で，彼の 'sely' な性格とその弱味は，'hende' Nicholas につけこまれ，Nicholas の「わな」('snare' 〔3231〕) におちてゆく。

'Hende' Nicholas に最初につけこまれたのが，彼の詮索好き (inquisityf 〔3163〕) な性分である。John は姿の見えない Nicholas の事を詮索し始め，Nicholas の部屋の戸を毀してまで勢いよく Nicholas のところへ突進していく。積極的に禍いに身を投じてゆく間抜け ('sely') な John は飛んで火にいる夏の虫，聴衆の嘲笑の的になる。さらに Nicholas の神秘的な秘密めいた口ぶりに，彼はその秘密 ('certeyn thyng' 〔3494〕) を打ち明けてくれとしつこくせがむ。この 'certeyn thyng' とは，Nicholas が John の妻の 'pryvetee (secret part)' (3164) を共有する為に，ノアもそれをよ

くしたといわれる天文により告げられた‘Goddes pryvetee’(3558)[24] を John に共有させて，自分の計略を成功させる為に仕組んだまさに‘Goddes pryvetee’である。その自分を間男する為の方便である‘certeyn thyng’つまり‘Goddes pryvetee’を自分に話すよう熱心にせがむ John の姿は，愚かでアイロニカルである。ここで聴衆は前口上における粉屋の言葉，“An housbonde shal nat been inquisityf/Of Goddes pryvetee, nor of his wyf”(3163-3164) を思い出す。John は，このような知恵も度量もなかった為，妻の事を詮索し，最後には，‘Goddes pryvetee’すなわち，天のはかりごとまで詮索し Nicholas の計略にのせられてゆく。

ノアの洪水を聞いた John は，まず妻のことが心配のあまり正気をなくしそうになる。先程勢いよく突進してきた彼と対照的で，すっかり考える力も失い，Nicholas に妻を救う為の助言を乞う。

Nicholas に全てをうちあけられて後，John は Alisoun に洪水の件を告げる。Alisoun の芝居気たっぷりな“Allas!.../Help us to scape.../I am thy trewe verray wedded wyf”(3607-3609) の言葉[25] にまたもや洪水がAlisoun をのみこむ様を思い浮かべて震え嘆き，うちひしがれる。

実は，このニコラス考案のノアの洪水は，ニコラスによると“...now a Monday next, at quarter nyght, /Shal falle a reyn”(3516-3517) と月曜日の午後九時に降り始め，“The water shal aslake and goon away/ About pryme upon the next day”(3553-3554) と翌日の午後九時頃に水はひく。聖書のノアの洪水は「百五十日後に水はひきさがった」（『創世の書』8. 3）とある。この聖書のノアの洪水が約半年続いたのに対し，このニコラス考案の洪水は約半日で，後者は前者のミニチュア版であることがわかる[26]。この半日間のミニチュア版の洪水を，ニコラスは“That half so greet was nevere Noes flood”(3518) とノアの洪水も半分に及ばない程大きいと言う。それをまともに受けて，このミニチュア版洪水に恐れをなし震え出す様はあわれ（‘sely’）で滑稽でもある。また Nicholas は，妻を心配する

John に，御聖体の祝日に演ぜられたという当時ポピュラーなサイクル劇におけるノアとその妻のエピソード[27]を思い出させ，妻と John と自分の分まで桶を作らせる。以上，John の‘sely’ぶりは‘hende’Nicholas に充分利用されたわけである。

ところが，この‘sely’という言葉にも‘hende’や‘joly’と同様，当時もっと別の思いがけない意味が複雑に内包されていたのである。‘sely’には 1. Blissful. 2. Spiritually blessed 3. Pious 4. Deserving of pity の意味がある[28]。これらの性格が作品の中でどうひきだされていくかみてゆくことにしよう。John は Nicholas の様子がおかしいと知らされて，自分を「めぐまれている」(blessed〔3455〕‘sely’) と思い，誇らしげに言う。“This man is falle, with his astromye. . . . /Ye, blessed be alwey a lewed man/That noght but oonly his bileve kan!” (3451-3456). 彼は自分を無知な（‘lewed’〔3455〕男としての誇りと幸せ（‘sely’）の実感を味う。しかし本当に彼は無知故に幸せなのだろうか。我々は彼のあわれな無知（‘selliness’）が彼の不幸（‘care’〔3232〕）の発端であるのを知っている為，彼のこの満足は滑稽でアイロニカルにうつる[29]。自分の信仰以外は何も知らないこの John は確かに‘pious’（‘sely’）である。この‘pious’（‘sely’）な John は学問，特に天文（‘astromye’〔3457〕）に疑いを持つ。彼は天文に夢中になった為，神の罰として穴（‘marle-pit〔3460〕）に落ちた天文学者の例を挙げる。‘pious’（‘sely’）な John は“Men sholde nat knowe of Goddes pryvetee” (3454) なる信条を持っている。この‘pious’な点を‘hende’な Nicholas は考慮に入れて最初に口にするのが天文ならぬキリストの名“Cristes conseil” (3504), “Crist forbede” (3508) であった。これは‘pious’（‘sely’）な John を厳粛な気持にさせる効果があった。‘Goddes pryvetee’ (3454) を詮索すべきではないと信じていた‘sely’（‘pious’）な John も Nicholas からノアの洪水の話を聞いてしまったばかりに，“Thou art so wys,” (3599) なる Nicholas の言葉

通り，‘sely’無知ではなくなる。故に彼も星を見ていた天文学者同様穴にではなくとも床に落ちることになる。

‘Hende’な Nicholas との絡み合いで，その‘sely’ぶりを発揮してきた John は聴衆の嘲笑を買い続けてきた。この彼は，Absolon が訪れる例のクライマックスシーンの始まる前に桶の中に引き籠る。 Alisoun の安否を心配する心労と三つも桶を作った肉体労働にすっかり疲れ果て，狭い吊り桶の中で呻き嘆く John の姿は滑稽であわれ‘pitiable, deserving of pity’(‘sely’) でもある。しかもその間に，彼が睡魔に襲われて熟睡中に，Nicholas と Alisoun は事もあろうに自分のベッドでお楽しみ。「水だ」の叫びで目が覚めた John は，まだ二人の計略に気づかないで，Nicholas の言葉を神妙に守って，すわ洪水の到来と信じて桶の綱を切り落下。骨を打って痛い目にあった‘sely’John はその上，洪水の事を人に話した為 Nicholas の予言通り気違い扱いされ，騙されて間男された者として町中の笑い者にされてしまう。皮肉にも洪水予言は実現しなかったのに洪水を他言すると気違い扱いされるという予言は見事に当たってしまったのである。

V

ファブリオの素材を選んだチョーサーの創作態度の背後に彼の人間に対する根本的な姿勢をみることができる。彼は，ファブリオの登場人物の類型的かつ一面的な判断に着眼した。すなわち，ファブリオの登場人物に重層的な意味を持つ呼称をつけることで，もっと現実味のある人間に吹き替え，彼らに一元的な，ある意味では絶対的な価値判断を適用することを避けた。人間の生きるこの地上世界は相対的価値判断しか通用しない。だからこそ彼の登場人物達は互いの相互作用で意外な性格をひきだしあう。しかもその自分の性格が応報を招いてしまう。ファブリオに加えられたチョーサーのこの創意工夫の裏には絶対的価値判断を下せる唯一の視座，神の視座を常に意識しているチョーサーの姿が窺えるのである。彼は人間の地上世界を神の視座のも

とでの相対的価値の世界，いわば神の視座からみれば‘game’の世界あるいは‘God's Plenty’（神の豊饒）の世界なのだという意識があったのではないだろうか。ファブリオでは登場人物達がどんなにずるく立ち回っても最後には応報を受けて笑いのうちに赦される。これはチョーサーにそのまま受け継がれて，どんな罪深き人間も「償い」の機会は与えられ，最後に神に赦される世界となる。最後に神の判断のもとに行きつく迄は，地上での旅路は所詮‘game’の世界と言えるかもしれない。この世界こそ「粉屋の話」を含む，カンタベリーへの巡礼達の繰り広げる『カンタベリー物語』の世界に他ならない。そしてこの『カンタベリー物語』は最後にもろもろの地上の罪の告解をすすめる長い，しかしありがたい説教たる「主任司祭の話」で終わるべく約束されてあったのである。そういう約束を前提とした世界をチョーサーは伝統的ファブリオ中の人物を肉づけすることによって提供したのである。

注

使用テキストは，F. N. Robinson ed., *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford University Press, 1957) による。

1 W. F. Bryan and Germaine Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (New York: Humanities Press, 1958), p. 106.

2 チョーサーの類話は W. F. Bryan and Germaine Dempster, *op. cit.*, L. D. Benson & T. M. Andersson (eds.), *The Literary Context of Chaucer's Fabliaux* (New York: The Bobbes-Merill, 1971) に集録されている。

3 Robert Hellman & Richard O'Gorman (trans.), *Fabliaux: Ribald Tales from the Old French* (New York: Thomas Y. Growell, 1965), pp. 188–189.

4 Antifeminism in literary tradition, defined strictly, refers to those writings which revenge themselves upon woman's failure to conform to male pecifications by presenting her as a nagging bully and an avaricious whore. Though the attitude arose in part from certain premises of classical and Judeo-Christian philosophies, by the later Middle Ages it had developed into a tradition of social and personal satire, providing rich opportunities for the deployment of a caricature sometimes mischievous

but often sour. (H. P. Weissman, "Antifeminism and Chaucer's Characterization of Women", *Geoffrey Chaucer: A Collection of Original Articles*, ed. G. D. Economou [New York: MacGrow-Hill, 1975], p. 93.)

5 Eileen Power, *Medieval Women*, ed. M. M. Postan (Cambridge: Cambridge University Press, 1975), p. 10.

6 There are mainly two kinds of irony: dramatic irony and verbal irony. Dramatic irony is the irony produced from the situation or event which brings about results exactly reverse of character's intention. Verbal irony is the irony that an ironist intentionally expresses the contrary meaning by using words or actions. Something is said but something quite different is meant. (D. C. Muecke, *Irony*, ["The Critical Idiom 13"; London: Methuen, 1970], pp. 49–66.)

7 E. T. Donaldson, *Speaking of Chaucer* (London: The Athlon Press, 1970), p. 17.

8 *Ibid.*, pp. 19–20.

9 なお *MED* はこの 'hende' の形容詞的意味として下記のような意味の location を伝えている。

1. (a) Having the approved courtly or knightly qualities, (b) noble, courtly, well-bred, refined, sportsmanlike... (c) powerful, noble; (d) beautiful, handsome; (e) valiant, rich... 2. (a) Of God, Christ, the Virgin: gracious, merciful, loving... 3. (a) Skilled, clever, crafty... (b) helpful, (e) Near, close by, handy.

2. (a)の意味も Nicholas の性格に読みこむとすると，洪水をおこした神の慈愛とおんたくらみがわい曲化されて Nicholas の属性としてあることがわかる。なお，'joly' 'sely' については *MED* のそれぞれの項がまだ出版されていないので資料として用いることはできなかった。

10 Beichner, "Chaucer's Hende Nicholas", *MS*, XIV (1952), 151.

11 *Ibid.*, 152.

12 John O'Connor, "The Astrological Background of the Miller's Tale", *Speculum*, XXXI (1956), 120–125.

13 Cf. 3457–3460. John は星を眺めながら歩いていて，こやし溜めに落ちた天文学者の話をするが，はからずも Nicholas もこの学者と同じ運命をたどったことになる。

14 旧約聖書の中のダィヴデの王子アブサロムは髪が長くて美男，妹の受けた恥辱の復讐をするが，御自慢の長い髪が命取りとなる。(『サムエルの書下』13–18)

15 ロマンスのヒロインの常套描写については次の論文がある。D. S. Brewer, "The Ideal of Feminine Beauty in Medieval Literature, Especially Harley Lyrics, Chaucer and Some Elizabethans", *MLR*, L (1955), 257–269.

16 この教区書記が名前をもらった聖書中のダヴィデの王子アブサロムも，伝統的に女性的に描かれ，金髪の御自慢の女性的な美男としてのイメージが一般の人々の間に定着していた。(P. E. Beichner, "Absolon's Hair", *MS*, XII 〔1950〕, pp. 222–233.)

17 これまで論じた Absolon は『バラ物語』(*The Romance of the Rose*) の中で Love が lover に与える commandment に忠実に従っている。(Cf. Guillaume de Lorris & Jean de Meun, *The Romance of the Rose*, trans. H. W. Robbins, 〔New York: E. P. Dutton, 1962〕 2125–2166, Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning* 〔Berkeley: University of California Press, 1973〕, p. 227.)

18 彼の恋歌は『雅歌』を思わせる。(Cf.『雅歌』5. 2 (Song of Solomon, V. 2) R. E. Kaske, "The Canticum Canticorum in the Miller's Tale", *SP*, LIX (1962), 482.

19 E. T. Donaldson, *op. cit.*, p. 26.

20 Cf. "The Pardoner's Tale", 479–482,

21 この動作は kiss の後，すぐまた，侮辱をぬぐいさろうとして繰り返される。その時の様子をチョーサーは "Who rubbeth now, who froteth now his lippes /With dust, with sond, with straw, with clooth, with clippes" (3747–3748) と描写して，ぬぐいさるものありとあらゆる物を並べて滑稽さを出す。

22 彼はこの事件の中でイニシエーション (initiation) を経験する。(海老久人，「The Miller's Tale の笑いの世界」関西医科大学教養部紀要66号11月号，〔1976〕 p. 16.)

23 *Ibid*, p. 16.

24 Wife's pryvetee とは 'her sexual life' に関することで，'Goddes pryvetee' とは 'the secret of divine dispensation' を指す。この pryvetee は Nicholas と John だけでなく，クライマックスで Absolon にもかかわってくる。つまり，彼の遭遇したものは wife's pryvetee (wife's secret part) であった。チョーサーは 'pryvetee' を使って 'pun' の効果を出す。(James Winny, *The Miller's Prologue and Tale* 〔"Selected Tales from Chaucer"; Cambridge: Cambridge University Press, 1965〕, p. 15.)

25 Alisoun は既に Nicholas の洪水の企みを知っており，夫の John を騙すため芝居をしている。

26 この洪水の期間という外的な長短，規模の大小によるパーレスクは，この二つの洪水を支える内的な教訓にまで及んでくることになる。聖書のノアの洪水は人間の邪淫の故に，神が人間を罰せんがためにおこしたもの。一方 Nicholas 考案の洪水は，人間の邪淫の故に当の人間のひとりたる Nicholas の邪淫のスケープゴートにされる。おのれの邪淫を満足させるために仕組んだもの。'sely' な John は Nicholas の邪淫のスケープゴートにされる。（斎藤勇著，「中世のイギリス文学—聖書との接点を求めて」（東京：南雲堂，1978），p. 258.）

27 *Ibid.*, pp. 262–265. Cf. K. B. Harder "Chaucer's Use of the Mystery Play in the Miller's Tale", *MLQ*, XVII (1956), 193–194.

28 'seely', the *Oxford English Dictionary*, H. S. Corsa, *Chaucer*: *The Poet of Mirth & Morality* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1964), p. 110.

29 こうなると，*O. E. D* でこの 'sely' の16世紀以後の用例としてあげられている「愚か」「単純」「無知」(foolish, simple) という意味も読みこみたい誘惑にかられる。